

・書評・

M・V・ラブリチエンコ

「マーシャル・プラン」と西欧農業の荒廃

丸 毛 忍

化されたアメリカ農業者の零落

第六章 西欧諸国勤労農民の破滅とマーシャル政策

に対する共産党指導下の勤労大衆の闘争

第七章 ソ連および人民民主主義諸国農業の戦後における力強い昂揚

M. B. ЛАВРЕНЧЕНО, «ПЛАН НАПРАВЛЕН НА РАЗОПРЕДЕЛЕНИЕ СЕЛСКОГО ХОЗЯЙСТВА ЗАПАДНОЙ ЕВРОПЫ», Госполитиздат, 1950 は、一九五〇年末モスクワの国立政治文献出版所で刊行されたB 6版二一五頁の本である。  
著者M・V・ラブリチエンコについては、ソ連の他の著者の場合と同じく、殆んどこれを知ることが出来ない。目次を示そう。

第一章 「マーシャル・プラン」——アメリカ帝国主義による西欧の政治的経済的従属計画

第二章 西欧のマーシャル被援助諸国農業の衰頹

第三章 西欧諸国の苦しい食糧事情

第四章 「マーシャル・プラン」の破綻とアメリカ

帝国主義の貿易政策の失敗

第五章 「マーシャル・プラン」の実施によつて激

本書は、目次からみれば、まず総論的な意味でマーシャル・プランの性格を明らかにし、次いで西欧農業の実態、特にマーシャル・プランの影響——それが西欧農業の改善に寄与していない点を跡づけ、さらにマーシャル・プランと表裏一体をなすアメリカの貿易政策、なかんづく農産物貿易政策の行詰り、それがアメリカ農業者の没落をすら阻止し得ない事実を指摘し、再び西欧農業にもどつて、そこでの農民層の分解と彼等のマーシャル・プラン反対の闘争の必然性、およびマーシャル・プランを拒否した東欧諸国の農業の発展を強調することによつて結論ないし展望にかえるという、極めて立体的な構成をとり、西欧農業の歴史的な地位を世界的視野のなかで浮び上らせることを意圖している。

本書の取扱つてゐる時期はマーシャル・プランの開始された一九四八年から四九年、および五〇年の上半期までであり、西欧の経済復興が資本主義的な線で進められることがほぼ明らかとなり、東欧が分離し、アメリカの西欧経済に対する把握が強められた段階に當つてゐる。だが朝鮮事変以後の世界的な再軍備経済の段階には全く触れておらず、その意味ではアップ・ツウ・デットな著書とはいえないであらう。

本書の利用している資料は、著者の原則的な立場についてはレーニン、スターリン、ジューダーノフ、マレンコフ、モロトフ、ミコヤンなどのソ連政治指導者の著書や演説集であり、各国農業の実態についてはFAO、ECE、OECEおよびアメリカ農務省の刊行物が主であり、資料自体としては、特に目新しいものはない。問題はこれらの資料の解釈というか、これらの資料を駆使しながら、どのような立論が導き出されているかであろう。

本書がマルクス主義経済学の観点に立つものであることはいうまでもないが、序文、序論、あとがきに類するものが付されており、ラブリチェンコの特に本書における立場や方法は明かでない。著者の使用する用語や概念は勿論常識的に理解し得るものだが、ただ著者が本書で展開している見解の枢軸をなす恐慌、農業恐慌の意味が明確でない点は、本書にとつての大きな理論的マイナスになつているとみられる。

本書の各章はいくつかの共通の事項について国別の動向を記述する組立になつてゐるが、その場合、各国の農業部門の国際的なまた一国内でのウェイトが考慮されていないので、例えば東欧のある国で小麦の生産が増加したり、フランスの煙草工業がアメリカからの輸入のため打撃を蒙つたといった個々の事実が——それ自体としては重要であつても——著者の筆先一つで甚だ誇張された印象を与えるおそれがある。このことは本書が主として流通的な側面からみた各国の農業生産の数量的な把握に終始し、農業生産の質的な側面、農業の生産構造を分析していないことと符合し

ている。もつとも第五章、特に第六章では農民層の分解の問題にも若干触れており、それ以上のことは本書のような概説書の課題外であるかも知れぬが、その点はある程度肯定するとしても、構造的な分析を欠いていることはやはりマルクス主義経済学の立場をとる本書にとつて致命的な弱点たるを免れないであろう。

農業生産および貿易についての数字はかなりひろわれているが何故か殆んどいつていいほど、統計表が使用されていない。そのため本書の分析は嚴密さを妨げられている点か少くなく、本書のもつ大衆性を考慮しても理解し難いところである。なおラブリチェンコは「平均的な資料が実状を反映していない」(六七頁)ことをしばしば強調するが、単なる批判に終り、これに代るべき別個の指標を提示するまでには至っていない。

本書の各章の叙述はよくバランスがとれており、「マーシャル・プラン」と西欧農業の関係を手際よく論じた書物としての価値は認められよう。本書の特徴は、事実のフォローに重きをおくFAOその他の刊行物に比し、むしろ一定の政治的階級的観点に貫かれた分析なり、アメリカの対外経済政策に対する假借のない批判を行つておることにあるが、その観点の貫徹や批判が充分に具體的な分析によつて裏づけられているとはいひ難いであらう。このことは本書が七万五千部の発行部数をもつことと無関係ではない。ソ連では経済書もまたこのような広い範囲の読者を予想し、彼等を啓蒙教育する目的に役立つような形で書かれねばならない——ソ連の読者は今のところわが国の読者と較べてそれほど高い

経済学の知識をもつていとはいえない。だが無論それは理論的な嚴密さや水準を引下げていることを意味しないし、むしろ高度の理論が大衆に受入れられること、換言すれば理論が実践を通じてためされることのなかに、ソ連の経済学の新しい性格が見出されるのである。だが今日の段階では、著書が多数の讀者を持つということはしばしば理論的な分析が政治的指導者の片言隻句の註解や、單なる事実の記述にすりかえられる懸念なしとしない。本書もまたそのような欠陥を免れるものではないであらう。

結局、ソ連側の西欧農業の現段階に対する見方を知ること以外には——最初に述べた本書の構成の意図するところもこの限りでしか果されていない——本書で用いられている分析の道具や方法から多くの学ぶべきものを期待することは出来ないようである。

## 二

すこし各章の内容に立入つて論評したいが、内容自体の紹介は省略し、三、四の問題点についてのみ触れることにする。

ラブリチエンコは、マーシャル・プランによる歐洲復興計画は直接的にはアメリカの過剰物資の歐洲市場における実現を目的とするものであり、それは必然的にアメリカ独占資本に対する西欧諸国の政治的経済的従属をもたらし、西欧農業を荒廃せしめる、また西欧諸国においてかかるアメリカの政策を支持するものは反動的、反人民的なブルジョア政權であり、その農村における基盤は地主、富農に外ならず、彼等は恐慌からの脱出の道を再軍備の強行

第三次世界大戦に求めざるを得ない、とみている。だがこのようにマーシャル・プランが西欧の經濟復興に全く寄与しなかつたとなす見解は少くとも現実を無視するもので、むしろ問題はその復興方式が戦後資本主義の性格として極めて不安定であり、アメリカ独占資本に対する政治的経済的従属をとまなつているところにあるのではないだろうか。

またソ連諸國は歐洲全体の經濟計画化は内政干渉をもたらずとして、マーシャル・プランに反対したが、その後におけるソ連諸國の經濟復興計画の進展をみると、広域經濟圈の形成に従つてソ連に対する東欧諸國の政治的経済的従属は避け難いようである。この二つの従属形態の比較は今後問題とならう。

著者は西欧の農業生産が戦前水準に達せず、四九年にはむしろ逆転の勢にあるにもかかわらず、食糧価格が低落していることをもつて、西欧諸國は既に農業恐慌にあるとみているようだが、戦後における農業恐慌の特徴として次の諸点を指摘しておく必要があらう。第一に農業生産におけるアメリカの役割の増大であり、例えば、戦前に較べてアメリカの農業生産は二倍近く増加し、アメリカの小麦輸出は世界小麦輸出の一〇・一五%から四〇・五〇%に上昇した。西欧の小麦輸入の七五%がアメリカからのものである。第二にこのようなアメリカの役割の増大がマーシャル・プランによる西欧經濟の軍事化、そのアメリカへの従属によつて支えられていることである。第三にソ連諸國の有する穀物輸出余剰が反資本主義な勢力の手中に握られていることである。

マーシャル・プランはなるほど四九年、五〇年において西欧の農業生産を戦前水準にまで回復しなかつた。ラブリチェンコはこの点を鋭く指摘しながら、ソ連圏諸国の同様な農業生産回復の立遅れには、故意かどうか知らぬが、全く触れておらない。また著者によれば、四九年、五〇年において西欧諸国の食糧消費は低下したという。だが農林省訳『世界の食糧と農業、一九五二年の見透し』(FAO, The State of Food and Agriculture, Review and Outlook-1951) をみると、西欧の農業が四九年までに復興の大体の成果を達成したことを評価し、また時期は多少ずれるが、一九五〇～五一年に大部分の国では価格の上昇にかかわらず食糧消費は減じなかつたと書かれている。いずれの側にウェイトをおいて物を見るかの差であらう。

ラブリチェンコは、マーシャル・プランによるアメリカの穀物輸出は西欧の政治的経済的従属をともし強制的なものであると同時に、アメリカ納税者の負担によるダンピングであり、それは競争者を排除し、輸入国の生産を破壊し、外国市場の購買力の減退をまねき、結局輸出を減少せしめることを指摘する。事実アメリカの輸出は一九四七年以来減少しており、一九四九年には農産物輸出の六〇%がマーシャル援助および軍事費で支払われた。著者は救済策の一つとして東西貿易の再開を提起する。これはドル不足と失業に悩む西欧にとつて大きな魅力だが、東西貿易を阻害したのはむしろソ連側の東欧に対する強引な社会主義化政策であつたし、アメリカの援助費が年間五十億ドルであるのに

比し、戦前の最高の年で東西貿易量は十億ドル程度であつたことを記憶しておく必要があらう。

さらにラブリチェンコはマーシャル・プランの基地であるアメリカの農業においても、またマーシャル・プランの制圧下にある西欧の農業においても、戦後惑々資本主義の発展が進み、農民層の分解が始められていることを特別に強調する。彼は土地所有や経営規模に関する数字をあけて、アメリカや西欧のすべての国々のそれぞれ個性的な農業に同一の現象がみられることを例証しようとするが、提示されているのは多く戦前の数字でしかなく、個々の国の特徴は殆んど把握されていない。なおアメリカについては農産物販売会社やこれと結んだ銀行の役割が注意されているが、これも単なる指摘を出していない。この部分の分析が弱いため、その後に来るフランスやイタリーの農民のマーシャル・プラン反対・自国農業防衛の闘争が必然性をもつて盛り上つて来ず、単なる政治的な運動にすぎないような印象を与えている。

最後に、ラブリチェンコはソ連および人民民主主義諸国の農業の復興および社会主義改革の歩みに触れているが、ここでは肯定的な事実を並べるだけで、全く分析を行つておらない。だが単に制度や組織上の変革——その歴史的意義を認めるにやぶさかではないが——を誇示するだけで、具体的な生産構造の分析を欠くならば、社会主義変革の過程において夫々の国の農業が当面する切実な問題から読者の眼をそらし、むしろ量眞のひきたおしになるのではないだろうか。